

吉川七菜子（令和三年一月号）

春学期合同研究発表会ようやく分かったゴウハツの意味

4ヶタのパスワードあり授業への招待状のようなメールに

オンライン講義の感想、要望を書き込みたいなら百字以内で

人をダメにするクッションやら炬燵やら画面の中が傾きだして

我のみがりモートゼミの日教室を見ている監視カメラのように



●作者の言葉

今年の春、宮崎から上京し、パソコンの画面上でしか見たことのない友人とキャンパスでついに会うことができた。

実際に会ってみると、同じ研究室のY君は思ったよりずっと背が高く、画面上でちよつと怖いと思っていたT先輩は、何を言っても笑って

くれる優しい先輩だった。今私は、大学院二年生。「国語科教育特論1」は、憧れだったキャンパスで受ける最初で最後の授業だ。「こんな歌作っただけけど、どう？」なんてことが言える友達もできた。このページを開いて真つ先にその友達に会いに行きたい。

●選者の言葉

新型コロナウィルスに関わる歌が目立ったこの一年、コロナ禍に翻弄される大学生の実情をうたった吉川七菜子さんの作を年間選者賞とした。

通学できず他の学生や教員とのコミュニケーションが希薄な中、「招待状のようなメール」「百字以内で」などに作者が感じた冷たさが的確に表現されている。四首目は、オンライン授業の画面で他の学生を眺めている状況だろう。「傾きだして」から、多くの学生が授業に熱意を持ってなくなっている様子が伝わる。五首目は、ハイブリッド授業で自分だけが自宅から参加している場面。「監視カメラのように」から伝わる作者の違和感と孤独感は強烈である。コロナ禍での記録にもなる作品だと思う。